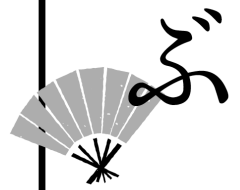


古典落語に



学



落語家

立川談四楼

第三十一回 転失気

転

失気は「テンシキ」と読みます。それが何かは後ほど落語の中に出てきますので、お楽しみに。

寺の和尚おしょうの体調がすぐれません。医者いしゃに往診おうしんに来てもらいますが、問診もんしんの途中、医者は「転失気てんしきはおありか」とたずねます。さあ和尚、転失気てんしきが何かわかりません。そこで知ったかぶりをして「ございません」と答える。

医者が帰ってからも和尚は転失気てんしきが気になって仕方がない。そこで小僧ちんねんの珍念ちんねんを呼び、「お前はテンシキを知っておるか」とたずねる。ところが珍念ちんねんも知らない。和尚はここで怒って見せる。「先日教えたはずじゃ。ここでまた教えてもよいが、そ

れではお前のためにならない。テンシキを近所で教わり、あったら借りてきなさい」と命めいじる。

と

ところが近所の人も誰一人として知らない。そしてそろって知ったかぶりで、いい加減なことを言う。「棚たなの上から落ちて割れてしまった」だの「人に差し上げた」だの「たくさんあったが、味噌汁みそしるの具にして食べてしまった」などと。さあ珍念さん、困った。「そうだ、薬をもらうついでにお医者さんに聞いてみよう」

医者は親切に教えてくれた。「医学で言う転失気てんしきとは『氣きを転まろめ失うしなう』と書いて転失気てんしき。つまり屁へ、おならのことじゃよ。

『傷寒論』という書物に書いてあり、腸の働きを診るため和尚にたずねたのじゃ」

ここで珍念は和尚が転失気を知らないことを悟ります。寺に帰り、「テンシキのことがわかりました。テンシキとは盃のことです」とウソを言う。

和尚、またも知ったかぶりで、「その通り。『呑む酒の器と書いて呑酒器』だ。よく覚えておきなさい。これからは来客の折に呑酒器を見てもらうから、盃を出しておくように」

医

者が再び往診に訪れます。和尚は「先日テンシキがな」と申し上げましたが、実はありました」と報告した。

「そうですね、それは何よりです」「今日はそのテンシキをお目にかけてみましょう」「えっ、ここですか」「そうです。当寺に伝わる自慢のテンシキです」「自慢の?」「これ珍念や。三ツ組のテンシキを持ってきなさい」「三ツ組ですか」

珍念、何食わぬ顔で盃の入った箱を持参します。

「この箱の中に転失気か?」「そうです」「臭うことはありませんか?」「大丈夫です。よく洗って布で拭いてございます」「洗って? 布で!?」「どうぞ、ご覧ください」「ほう、立派な盃ですね」「左様、呑む酒の器で呑酒器です」「寺方では盃を転失気と言いますか。医学では放屁、屁、おならのことなのですが」「えっ、何と? これ珍念、ウソをついたな。こんなことで人

をだまして恥ずかしいとは思わないのか」

「はい、屁とも思いません」

こ

れが転失気です。意味がよくわかったでしょう。珍念の「屁とも思いません」というオチがいいですよ。

知らないことは知らないと言えはいいのに、それがなかなかできないのが人というもの。知ったかぶりをしたためにとんでもないことになるという噺です。

この「転失気」、学校寄宿では、いわゆる鉄板ネタです。特に小学生の低学年では大ウケです。この年代の子はウンチやおならという「下ネタ」がどういうわけか大好きで、転失気の意味がわかった途端に大喜びなのです。学年に、転失気が流行ることもあるそうです。誰かがおならをすると、「あ、転失気だ」と大騒ぎになるとかで、先生が笑いつつ困ったような顔をしながら話してくれました。

また、この噺は東西の若手落語家がよく演じます。若手にとっても笑いを多くもらうのは自信になるのです。医者がなぜ盃がテンシキなのかをたずねたところ、和尚が「盃を重ねるとプー(周囲からの不平不満)が出ます」というオチもあり、だまされた和尚が「どうりで臭い話だと思った」とやる人もいます。